第七部 諸国に対する宣告

イザヤ 13章～23章

□宣告対象の国々

A) バビロン	13 : 1～14 : 23
B) アッシリア	14 : 24～27
C) ペリシテ	14 : 28～32
D) モアブ	15 : 1～16 : 14
E) ダマスコとサマリア	17 : 1～14
F) エチオピア	18 : 1～7
G) エジプト	19 : 1～25
H) エチオピアとエジプト	20 : 1～6
I) 海の荒野 (=バビロン)	21 : 1～10
J) エドム	21 : 11～12
K) アラビア	21 : 13～17
L) 幻の谷 (=エルサレム)	22 : 1～25
M) ツロ	23 : 1～18

遠い将来のバビロン

異邦人信者の軍隊が
バビロンを破壊する。
バビロンには、永久に
人が住まなくなる。

エジプトとアッシリアは、
メシアの王国で祝福を受ける

近い将来のバビロン

エラム (ペルシア) と
メディアが、バビロン
を倒す

二人の執事についての預言

□バビロンについて

1. 二つの都市：エルサレムとバビロン

聖書に登場する都市の中で、最も重要な都はエルサレムである。エルサレムは、神が神の民イスラエルのただ中に住まうために選んだ場所だからである。

聖書には、もう一つの重要な都がある。それは、バビロンである。人間が建設した都市の最初であり（創世記 10 : 10 「バベル」）、神への反逆事件を起こした場所である（創世記 11 : 1～9、バベルの塔事件）。

2. バビロンは世界的覇権国家の都であり続ける

バビロンは、バベルの塔事件で終わった都市ではない。イザヤが預言していた時代に最強国であったアッシリアをのちに打倒するのは、バビロンを王都とするバビロニアである。

そして、そのバビロニアが南王国ユダを滅ぼす。エルサレムは陥落し、神殿は破壊される。この時から、「異邦人の時」（ルカ 21 : 24）と呼ばれる時代に入る。エルサレムの地域が異邦人に支配される時代である。異邦人の時は、1948年のイスラエル再建国を経てもなお、現在に至るまで続いている。

エルサレムを支配する覇権国家は、聖書の預言では4つである。第一に、バビロニア、第二にメディア・ペルシア、第三にギリシア、そして「第四の国」である。そして、これら4つの覇権国家のすべてがバビロンに都を置く。歴史は、第三の国ギリ

シアまで、実際にそうだった。ギリシアの王アレキサンドロスも東西融合政策を推進するためにバビロンを王都とし、かの地で病気のため急死した。

3. 第四の国の最後の王は反キリスト、その都はバビロン

第四の国について、聖書は特定の国名を語らない。なぜなら、第四の国は、ローマ帝国で始まり、その後、ローマの統治体制や軍事組織の基本を継承した世界の覇権主義国家群全体を指すからである。現代に至るまで、第四の国の時代が続いている。

ギリシア帝国の次にエルサレムを支配したのはローマ帝国である。その都はローマであり、コンスタンティノープル（現在のトルコのイスタンブール）であって、バビロンに置かれたことはない。しかし、将来、バビロンが再建され、大患難期においては第四の国の都となる、というのが聖書の預言である。

大患難期の7年間において、その前半期ではバビロンに世界統一宗教の本部が置かれ、後半期でついに、反キリストによる世界統治の首都となる。第四の国の最後の王は反キリストであり、その都はバビロンである。

4. 大患難期末期、ハルマゲドンの戦いの中で、バビロンは攻撃される

大患難期の末期、反キリストは諸国の軍勢を召集してエルサレムを攻撃し、さらにヨルダン川東側の深い山間の地ボツラに向けて進撃する。ボツラには、反キリストによる迫害を避けて、イスラエル民族の大半が避難している。

これが、いわゆる「ハルマゲドンの戦い」であるが、戦場となるのはエルサレムとボツラであり、ハルマゲドンではない。ハルマゲドンとは、エルサレム攻撃前に、反キリストが彼の軍勢を集合させる場所である。そこは、イスラエル北部の交通の要衝地、メギドの丘の下に広がる広大な平野である。ハルは「丘」、マゲドンは「メギドの」という意味である。

反キリスト軍がハルマゲドンに集合するとき、バビロンが反キリストに抵抗する勢力によって攻撃される。しかし、反キリスト軍はバビロン防衛に戻らず、エルサレム攻撃を敢行する、と聖書は預言している。

イザヤ13章は、そのときのバビロン陥落に関する預言である。14章はイスラエル民族の回復の預言で始まるが、テーマはバビロンの最後の王である反キリストの末路と、陥落したバビロンのその後、すなわちメシア王国においてバビロンはどうなるか、という預言である。

□ 「A」 バビロン 」のアウトライン（イザヤ13：1～14：23）

1. バビロンの陥落（13：1～22）
2. イスラエル民族の回復（14：1～2）
3. バビロンの王の転落（14：3～23）

A) バビロン 13 : 1～14 : 23

1. バビロンの陥落 (13 : 1～22)

(1) バビロンの重荷 (13 : 1)

13 : 1 バビロンについての宣告。これはアモツの子イザヤが見たものである。

- 「宣告」ヘブル語でマサ、重荷という意味。バビロンの上に重荷が置かれる。重荷は神のさばき、よって、さばきの宣告である。その幻を見させられた預言者イザヤにとっても重荷である。預言者はそれを語らねばならないからである。

(2) バビロンを攻撃するために異邦人信者たちの軍勢が集められる (13 : 2～5)

13 : 2～5 「はげ山の上に旗を掲げ、彼らに向かって声をあげ、手を振って、彼らを貴族の門に入らせよ。わたしは、わたしに聖別された者たちに命じ、また、わが怒りを晴らす勇士たち、わが威光に歓喜する者たちを呼び集めた。」

おびたしい民にも似た、山々のとどろく音、集まって来る国々、王国のどよめく音がする。万軍の主が軍隊を召集しておられるのだ。彼らは遠い地から、天の果てからやって来る。全世界を滅ぼすための、主とその憤りの器だ。

- わたしに聖別された者たち・・・信者を指す
- 国々、王国（複数形）・・・攻撃軍を構成する信者たちは多国籍
- 全世界・・・「全地域」。バビロンだけでなく、「シニアルの地」（創世記 10 : 10）全域ということ

(3) 主の日、全能者からの破壊のとき (13 : 6～16)

13 : 6～8 泣き叫べ。主の日は近い。それは全能者からの破壊としてやって来る。それゆえ、すべての者は氣力を失い、すべての人の心は萎える。彼らはおじ惑い、子を産む女が身もだえするように、苦しみと激しい痛みが彼らを襲う。彼らは炎のような顔で互いに驚く。

- すべての者、すべての人・・・バビロンに住み、反キリストによる世界支配に加担してきた人々
- 炎のような顔で互いに驚く・・・隠れてしてきたことが暴かれ恥ずかしさのあまり顔から火が出るような感覚を覚えながら顔を見合わせる

13 : 9~12 「見よ。主の日が来る。憤りで燃える怒りの、残酷な日が。地は荒廃に帰し、主は罪人どもをそこから根絶やしにする。天の星、天のオリオン座はその光を放たず、太陽は日の出から暗く、月もその光を放たない。わたしは、世界をその悪のゆえに罰し、悪しき者をその咎のゆえに罰する。不遜な者の誇りをくじき、横暴な者の高ぶりを低くする。わたしは人を純金よりも、人間をオフィルの金よりも尊くする。

- 尊くする・・・まれにする。人口密度が低くなる

13 : 13~16 それゆえ、わたしは天を震わせる。大地はその基から揺れ動く。万軍の主の憤りによって、その燃える怒りの日に。追い立てられた、かもしかのように、集める者のいない羊の群れのようにになって、彼らはそれぞれ自分の民の方に向かい、それぞれ自分の地へ逃げ去る。見つけられた者は、みな刺し殺され、連れて行かれた者は、みな剣に倒れる。彼らの幼子たちは目の前で八つ裂きにされ、家は略奪され、妻は犯される。

- それぞれ自分の民の方に向かい、それぞれ自分の地へ逃げ去る・・・大患難期の後半期にはバビロンは世界の首都であり、世界各地から多くの人々が集まっている。異邦人信者たちの軍隊の攻撃を目前にして、バビロンの住人たちが母国に逃げ帰るときの混乱に関する預言。
- この混乱の中では、殺人や略奪などの犯罪行為が起きる。その被害者たちは、反キリスト側に立って彼ら自身が同じことをイスラエルの人々にした加害者でもあると推測される。なぜなら、アブラハム契約の条項「わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう」（創世記 12 : 3）により、イスラエルを呪った人々は神の呪いを受けて、同じ目にあうことになるからである。
- この混乱は、異邦人信者たちの軍隊からの攻撃を受ける直前の出来事。よって、犯罪行為を異邦人信者たちが実行するわけではない。

(4) 大患難期後、メシアの王国ではバビロンは悪霊たちが住む場所となる (13 : 17~22)

13 : 17~19 見よ、わたしは彼らに対して、メディア人を奮い立たせる。彼らは銀をものともせず、金さえ喜ばず、その弓は若者たちを撃ち倒す。彼らは胎の実さえあわれまず、子どもたちにさえ、あわれみをかけない。こうして、諸王国の誉れ、カルデア人の輝かしい誇りであるバビロンは、神がソドム、ゴモラを滅ぼしたときのようになる。

- メディア人・・・バビロンを攻撃する異邦人信者の軍隊は、4 節に「集まっ

て来る国々」とあるように、多国籍から成り、「メディア人」に限らない。おそらく、「メディア人」が先鋒となるのであろう。

13：20～22 そこには永久に住む者もなく、代々にわたり、住みつく者もない。アラビア人もそこには天幕を張らず、牧者たちもそこに群れを伏させない。そこには荒野の獣が伏し、彼らの家々には、みみずくがあふれる。そこには、だちょうも住み、雄やぎがそこで飛び跳ねる。山犬はその砦で、ジャッカルは豪華な宮殿でほえ交わす。その時が来るのは近く、その日はもう延ばされることはない。」

- 荒野の獣、みみずく、だちょう、雄やぎ、山犬、ジャッカル・・・すべて悪霊を指している。「雄やぎ」はヘブル語「セイリム」、やぎの姿をした悪霊を意味する。家畜のやぎではない。

2. イスラエル民族の回復（14：1～2）

14：1～2 まことに、主はヤコブをあわれみ、再びイスラエルを選んで、彼らを自分たちの土地に憩わせる。寄留者も彼らに連なり、ヤコブの家に加わる。諸国の民は彼らを迎え、彼らのところに導き入れる。イスラエルの家は主の土地で、その寄留者を男奴隷、女奴隷として所有し、自分たちを捕らえた者を捕らわれ人にし、自分たちを追い立てた者を支配するようになる。

- 主はイスラエル民族を再びご自身の民とし、彼らを「自分たちの土地」、すなわち約束の地に憩わせる。その地域に住んでいた諸国民は、イスラエル民族を迎え入れ、自分たちは寄留者の立場になる。かつてイスラエル民族を迫害した国々の出身である彼らはイスラエルの民と共に住むが、その立場は寄留者である。そしてイスラエル民族に仕える立場となる。
- メシアの王国で、約束の地に寄留者として住む諸国民（異邦人たち）は、大患難期を生き延び、メシアの王国に入ることができたのであるから、大患難期において信者となった人々である。彼らを信者として判定する手続きは、メシアの王国が開始する前に行われる「諸国民のさばき」（マタイ25：31～46）である。

3. バビロンの王 (=反キリスト) の転落 (14:3~23)

(1) 王の杖が折られる (14:3~8)

14:3~4a 主が、あなたの痛み、あなたへの激しい怒りを除き、あなたに負わせた過酷な労役を解いて、あなたを慰ませる日に、あなたはバビロンの王について、このような嘲りの歌を歌って言う。

- あなた：イスラエル民族

13:4b~8 「虐げる者はどのようにして果てたのか。横暴はどのようにして終わったのか。主が悪しき者の杖を、支配者の笏を折られたのだ。彼は激怒して諸国の民を討ち、絶え間なく彼らを討ち、怒って国々を容赦なく虐げて支配したものだ。全地は安らかに慰み、喜びの声をあげる。もみの木もレバノンの杉も、おまえのことを喜ぶ。『おまえが倒れ伏したときから、もう私たちが切り倒す者は上って来ない。』

- 虐げる者、悪しき者、支配者・・・バビロンの王 = 反キリスト

(2) 反キリストは死んで、その靈魂はよみに落ちる (14:9~11)

14:9~11 よみは、下界で、おまえが来るのを迎えようとざわめき、死者の霊たち、地のすべての指導者たちを揺り起こし、国々のすべての王をその王座から立ち上がらせる。彼らはみな、おまえに告げる。『おまえもまた、私たちのように弱くされ、私たちに似た者になった。』

おまえの誇り、おまえの琴の音はよみに落とされ、おまえの下には、うじ虫が敷かれ、虫けらがおまえの覆いとなる。

- よみでは、歴史上登場してきた諸国の王たち（神を信じなかった王たち）が反キリストを出迎える

(3) 反キリストに力を与えていたサタンもまた、よみに落とされる (14:12~15)

14:12~15 明けの明星、暁の子よ。 どうしておまえは天から落ちたのか。 国々を打ち破った者よ。 どうしておまえは地に切り倒されたのか。 おまえは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山で座に着こう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』

だが、おまえはよみに落とされ、穴の底に落とされる。

- サタンの居場所は落ちてきたし、これからもさらに落ちる。

- 「明けの明星、暁の子」・・・神の御座近くで仕える天使の長であった
- 「天から落ちた」（第三の天から第一の天・空中に、エペソ 2：2、6：12）
- 「地に切り倒された」（大患難期の間で、黙示録 12：7～12）」
- 「よみに落とされる」（メシアの王国の千年の間、黙示録 20：1～3）。「穴の底」はよみの別称。
- サタンの最終的な行先は、「火の池」（黙示録 20：10）そこは、「ゲヘナ」（マタイ 10：28、18：9）、「永遠の火」（マタイ 18：8、25：41）とも呼ばれる場所。

(4) 反キリストの死体は墓に納められない（14：16～20）

14：16～18 おまえを見る者は、おまえを見つめ、おまえについて思いを巡らす。『この者が、地を震えさせ、王国を震え上がらせ、世界を荒野のようにし、町々を壊し、捕虜たちを家に帰さなかった者なのか。』諸国のすべての王たちはみな、それぞれ自分の墓で、尊ばれて眠っている。

14：19a しかし、おまえは、忌み嫌われる枝のように、墓の外に投げ捨てられる。

- 原文は「おまえの墓の外に」である。おそらく、反キリストはあらかじめ自分の墓を準備しているであろう。しかし、反キリストの死体は、彼が準備していた墓に納められることはない。

14：19b 剣で刺し殺された者たちで、おまえはおおわれ、屍のように、墓穴に下る者たちに踏みつけられる。

- これは、ハルマゲドンの戦いで、再臨のメシアによって反キリストが殺され、続いて反キリスト軍の兵士たちが殺されていく場面を預言している。まず反キリストが倒れ、その上に兵士たちの死体がおおいかぶさる。
- 「屍のように、墓穴に下る者たちに踏みつけられる」・・・直訳すると、「墓穴に下る者たちに踏みつけられる屍のように」。死んだ兵士たちの遺体が反キリストの死体の上に降り重なって倒れ込むのではなく、立ち姿のまま、足もとに反キリストを彼らの軍靴で踏みつけているかのような状態になる。

14：20 おまえは墓の中で彼らとともにいることはない。自分の地を滅ぼし、自分の民を虐殺したからだ。悪を行う者どもの子孫は永久に、その名を呼ばれることはない。

- おまえ＝反キリスト、彼ら＝配下の兵士たち。戦死した兵士たちは墓に葬られるが、反キリストの死体は墓に納められない。
- 反キリストの死体が墓に納められることのない理由・・・それは、自分の征服欲を満たすために配下の民を死なせたからである。
- 悪を行う者たちの子孫・・・反キリストと彼に追従した高官たちの子孫
- その名を呼ばれることがない・・・反キリストと彼の高官たちの家名が、メシアの王国で呼ばれることはない。高官の子孫の中に個人的に救われてメシアの王国に入る者がいたとしても、家名は引き継がない。
- 反キリストの死体が墓に納められることのない理由は、もう一つある。ハルマゲドンの戦いのあと、すぐに、反キリストの死体は、復活の体に変えられ、よみに落ちていた霊魂と合体し、「生きたまま」(黙 19:20)、火の池に投げ込まれるからである。

(5) 反キリストの子たちは殺される (14:21)

14:21 彼の子らのために屠り場を備えよ。先祖(複数形)の咎のためだ。彼らが立って地を占領し、世界の面を町々で満たさないように。」

- 彼の子ら＝反キリストの子たち・・・反キリストは、サタンと人間の女との間に生まれる。よって、反キリストの子たちは、サタンの孫である。

(6) 大患難期後、メシアの王国ではバビロンは悪霊たちが住む場所となる (14:22～23)

14:22 「わたしは彼らに向かって立ち上がる。——万軍の主のことば—— わたしはバビロンから、その名も、残った者も、子孫も末裔も絶ち滅ぼす。——主のことば——

- 主は、バビロンに住民を一人として残さない。メシアの王国の時代において、バビロンは悪霊の住みかになるからである。

14:23 わたしはこれを針ねずみの領地、水のある沢とし、滅びのほうきで一掃する。——万軍の主のことば。」

- 針ねずみ・・・悪霊を指す
- 黙示録 18:2 倒れた。大バビロンは倒れた。それは、悪霊の住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟、あらゆる汚れた憎むべき獣の巣窟となった。